

南アルプス市立豊小学校後期自己評価書

平成30年1月26日

1 後期自己評価の経過

- (1) 教職員自己評価及び保護者・児童アンケートの実施（12月4日）
- (2) 自己評価・アンケート結果を基にした職員会議（12月15日）
- (3) 学年会議にて状況分析と改善方策の審議（冬季休業中）
- (4) 自己評価書について審議（1月22日）

2 学校評価の分析と改善方策

(1) 教育目標について

教職員アンケートからは、学校教育目標についての3項目ともA「そう思う」・B「思う」をつけた職員が増えているため、前期評価より改善されている。

保護者アンケートの「学校の教育目標や教育方針を知っている」という項目を見ると、「十分知っている」と「ほぼ知っている」を合わせた数値は96%となっている。この数値は前年度とほぼ同じである。また、「十分に知っている」だけの数値を昨年度と比較すると1%増加した。数値が増加した理由として考えられることは、校長が毎月発行する「がっこうだより」「職員室・教室・廊下・ホームページ」等目につきやすい所に掲げている。さらに、各家庭に配付している「豊小学びプラン」には筆頭に学校教育目標を載せている。保護者も目にする機会が増えたのではないかと考えられる。これからも、教育目標や教育方針の周知を含め、保護者が豊小学校の教育目標や教育方針を十分に理解し、お互いに連携を取りながら子どもたちの成長のために、取り組んでいかなければならない。

(2) 学校経営・組織について

特別支援教育コーディネーターを二人体制プラス特別支援学級3名で務め、早期対応・きめ細かな支援、共通理解を図り、昨年度以上に組織的な対応ができるようになったことが伺える。ケース会議等、可能な限り早期に設定し、子どもの成長・支援の在り方を追究している。学校外の機関との連携を進め、医療福祉等とのつながりも多くなっている。校長のリーダーシップの下、特別支援教育において、全職員で自分のこととして、仕事をやり合う意識で取り組んでいることが成果として表れていると考えられる。

児童アンケートの生活面の多くの項目で、「4」と「3」を合わせた肯定的な回答は、前期とほぼ同じだったが、1年生以外の学年は「4」の割合が前期よりやや下がってしまった。学級・学年の実態に応じて、児童との関わり方や、あいさつや言葉遣いなどについて、教師側の反省も含め、児童のよさを認めつつ根気強く取り組んでいく必要がある。

また、保護者アンケートからは、「子どもは学校へ楽しく行っていた。」の項において殆どの児童が楽しく通っている。「教職員は、一人ひとりの子どもを理解し、

公平・公正に接している」,「学校は,あいさつを身につけさせようと取り組んでいる」の項については,昨年度よりもやや減少した。学校での取り組み,「徹底と継続」ということが,十分に浸透していないと考えられる。変化とメリハリのある活動が必要になってくる。

子どもたちが学校生活を送っている中で,課題のない学校はない。今年は特に,学級づくりが学力向上の要になるように,「学級力向上プロジェクト」に取り組み,学級課題を可視化させることで問題意識を持たせてきた。その中で「はがき新聞」を作り,自分の思いを周囲に伝えることにも力を入れてきた。学級力アンケートを取り,結果をチャート図に表し,分析評価し,課題設定をし,さらに取り組んで行く。この地道な活動の繰り返しだと考える。教職員一人ひとりが真摯に子どもたちに向かい合うこと,また,一人で抱え込むことのないような組織として,「チーム豊」としての取り組みが成果を上げたと考える。いじめなどの問題行動が起こった場合にも,「豊小学校いじめ防止基本方針」にのっとり,生徒指導主任が中心となり,全教職員で対応することが大切である。また,特別支援教育に関わるケースにおいても,分掌を機能させること,チームとしてみんなで関わり合って問題の解決に向かっている。教職員が共通理解と和をもって保護者と地域との信頼関係づくりを大切にすることを改めて確認し,さらに,「報・連・相・確」も徹底することを心がけていきたい。

(3) 学習指導について

学習指導に対する教職員アンケートの評価は,前期の数値とさほど変化はなかった。「評価基準・評価方法を明確にした授業づくり」の項においても,変化はなかった。「関心意欲を高める授業の工夫」「適切な課題設定による授業の工夫」「宿題や家庭学習に対する指導」の面で,やや数値が上がった。校内研究に対する職員の学びの姿勢,並びに豊小学びプランの徹底,学校長への自主勉強の提出等の成果と考える。

児童アンケートからは,多くの学年で,「授業が分かりますか。」「先生は,分かりやすく教えてくれますか。」の項の数値が上がった。しかし,前期の数値より,高学年になるに従って下がる傾向がみられた。特に,授業中の発言を苦手としている児童が多い。そこで,改善策として,ペア学習やグループ学習による学習形態の工夫(5年・6年),児童の実態に合った発問や支援の準備と工夫(3年・4年),答えを発表する発言はできるが,考えを発表する発言を促すための工夫(1・2年)などが出された。子どもたちが授業に見通しをもち,課題を自らの力で解決していく,そのことを通して,さらに意欲的な学習態度が生まれてくる実践を行っていききたい。

学力向上に向けて「学び合い高め合う学習」をめざした豊小学校学びプランを本年度も継続した。確かな学力が身につくためには家庭学習もまた重要である。本年度は,「家庭学習がんばろう週間」を年間7回設定した。保護者には,家庭との協力の下でノートをチェックしてもらうこと,一言子どもに声かけをしていただくことをお願いした。ノーテレビ・ノーゲームも家庭に呼びかけて実践した。

(4) 道徳について

前期の教職員アンケートの「年間計画に基づいて道徳の授業時数が確保できている」の項の数値は、前期と比べほとんど変化がない。2学期は、先生方が1学期の反省に基づき、道徳の授業時数の確保に努め、数値が上がった。教育を語る会や授業観察の中で、率先して道徳授業を実践された先生もおり、教科化へ向けて意識した取り組みであった。しかし、一部には、行事等への取り組みや遅れてしまった教科の授業を優先してしまったために、やむを得ず道徳の授業が後回しになってしまったように考えられる。道徳は、平成32年学習指導要領完全実施に向けて体験的、実践的な課題設定が重要になってくる。そのために、「特別な教科道徳」として資料・教材の準備や話し合い活動・討論を仕組んだり、ロールプレイを有効的に取り入れたりすることが大切になっている。いわゆるアクティブラーニングである。

道徳の授業は、週に1時間しかないので、教育課程にのっとり、学習指導計画を意識し、計画的に指導していく必要がある。教科化に伴い、慎重で丁寧に、そして、同学年の担任が道徳の授業について確認したり、相談したりすることで計画的に進められるのではないかと考える。

「教科や他領域との関連に考慮した道徳授業を進めている」「教材の資料・私たちの道徳を用意し、指導に改善や工夫を行っている」の項目の数値は前期とほとんど変わらず良好であった。学年の実態に合わせ、教材・教具や指導の工夫などを行うことにより、子どもたちの心情に訴える授業のあり方も考えていきたい。

小笠原流礼法を活かした心の教育について、今年度も学年に応じた内容で、各クラス2時間ずつ小笠原流礼法の授業を取り入れている。毎時間、師範に準備していただいている学習教材は子どもたちの興味や意欲を高めるものであり、楽しそうに学習している。形式や作法を学び、その基盤となる他者を思いやる心を養い、人間関係形成の素地となっている。

(5) 特別活動について

明るく楽しい学校生活を送るために、児童会や学級での決まりを決めている。昨年度から一貫して継続的に取り組んできた「あいさつ運動」については、今年度の児童会役員と児童会担当が毎朝玄関に立ち、登校してくる児童一人ひとりにていねいにあいさつする取り組みを行っている。また、下駄箱の靴をそろえる取り組みも、全校が揃えられるようになるまで徹底して取り組んだ。取り組み期間を過ぎても学級ごと継続して実施するなど定着してきている。先にも述べたように、保護者アンケートの「学校はあいさつを身に付けさせようと取り組んでいる」の項の「ほぼそう思う」の数値が1%下がった。僅かな減少だが、ここ2年続けて減少している。これからも継続した地道な取り組みが必要である。実際に児童のあいさつも個人差がある。今後は、あいさつされたら返すのではなく、「自分から先にあいさつする」「はっきり、気持ちよいあいさつをする」などのレベルアップを図っていきたい。明るく楽しい学校であれば、助け合う気持ちも生まれてくるだろうし、子ども同士の関係、家庭間のつながりも健全化してくると思われる。子どもたちに生きる力を育む素地にもつながっていくだろうと確信している。

(6) 学校行事について

2学期には、運動会や文化発表会などの大きな行事があった。これらの行事は、児童の実態に基づき、ねらいと内容を考えて実施した。職員アンケートからは、学校行事に関するどの項目も、前期より数値が上がった。しかし、授業時数も確保しながら、限られた時数の中で行事に取り組み、より成果を上げるとなれば、行事に取り組む時数確保の難しさもある。来年度は、運動場が仮設校舎のため半減した。実施会場の問題、保護者の観覧席、地区割り等早急に方向性を出すべき課題もある。今年度も行事ごとにアンケートを取り、多くの参考意見をいただいた。文化発表会には、大勢の保護者・祖父母、そして、地域の方々の参加があった。今年は小中一貫の手始めとして中学生も参加した。今年も、座布団席を準備し、立ち見参観者がないように配慮したが、多くの立ち見参観者も出ていた。大勢の方々が、関心をもって集まってくださったことに感謝しつつ、アンケートの御意見を参考に、来年度はさらに大勢の方々が観覧できる形態を工夫したい。

アンケートのほとんどは、各学年ごと工夫された発表や元気な豊小児童の様子が書かれており、文化発表会では、称賛の意見が多数を占めた。学校としては、いきいき人材活用遣事業の埴原先生に指導を仰ぎ、よりよい合唱を作り上げてきた。最後の授業卒業式につなげていきたい。

今年度の成果を基にして、来年度も子どもたちの成長が保護者や地域の方々に伝わるような行事を創造していきたい。

(7) 生徒・生活指導について

「あいさつ」については、「保護者アンケート」の結果からも、職員アンケートの数値からもあいさつができる児童が2極化していることがわかる。取り組み方に課題があるのか、なかなか定着しない。4年生の保護者からは「あいさつが進んでできる子とできない子の差がある。あいさつが返ってこない。」という御意見も寄せられた。どうしても個人差はゆがめない。習慣化までに高めるには、家庭との連携と継続した取り組みが大切である。「あいさつは、してもされても気持ちいい。ひと言で元気になる。」ことを実感させていきたい。日々の生活の中であいさつができればほめるということを見童会、職員、家庭、地域の取り組みを通して、日常化（当たり前）に繋げていきたい。

友達とのトラブルやいじめなどへの対応は、児童及び保護者とのコミュニケーションが重要になってくる。保護者アンケートの「学校は、子どもの問題に適切に対応している」の数値の「十分・ほぼそう思う」が昨年度より1%増えた。また、「不十分」と答えた保護者が0%であった。この数値に甘んずることなく、気を引き締めてきめ細かな対応を心がけていく。家庭との連携・情報発信等、改善していく必要がある。いじめの未然防止に心がけることはもちろん、もし、問題が起きた場合は、適切な早期対応をする。学校と保護者がお互いに協力・連携して始めて良い結果が生まれると考える。たいへん繊細で、デリケートなことだけに慎重でありながらも誠意を持って早期対応に心がけてきた。

(8) 勤務について

職場の多忙化解消に向け、定刻退勤日を月一回実践している。さらに、年休の行使も年平均10日以上を目標にしている。働き方改革の取り組みを進め、成果を出している。学校評価においては、前期の数値と比べるとやや向上している。2学期は大きな行事、仮設校舎での生活、引っ越しがあり、勤務状況も大変だったと思われる。行事の時数確保に苦労しながらも、児童とともに充実したものになるように追究した。3学期から新校舎での学びになり、教職員自身も充実感や達成感が生まれたのではないかとと思われる。だが、恒常的に忙しさが慢性化してくると、心身への変調の原因にもなってくるので、行事の精選やスリム化、また、一人で抱え込まずに、全職員体制（チーム豊）として、仕事をやり合う意識で職務に励むことができるよう、これからも互いに助け合い、支え合っていきたい。

(9) PTA・地域社会

保護者との信頼関係を築くことは、学級経営・学年経営にとってとても大切なことである。職員アンケートの「PTA・地域社会」の項目は、前期とほぼ同じである。また、保護者アンケートにおいては、「PTA・連携」の3項目とも昨年度より「十分にそう思う」の数値が下がった。日々の授業、児童を通して家庭に伝わること、学校だより・学年だより・学校開放日・ノート指導・ホームページその他、あらゆる発信材料から教育目標へ迫る営みに対して、改善していく必要がある。

2学期に行った運動会や文化発表会などの学校行事や授業参観においては、大勢の方々が参観に来てくださり、児童・学校に寄せる期待と関心の高さを感じた。児童が躍動感にみなぎり生き生きと活躍している場面を保護者や地域の方々に見ていただき、ともに児童について考えていくことで信頼関係が生まれてくると考える。

PTA活動としては、全保護者に年度をまたいでの引っ越し作業と早朝作業（9月）に御協力いただき、短時間での引っ越しと校舎周り及び農園が見違えるほどきれいになった。また、親子レシピ集作り（11月実施）、親子弁当作りの日（1月実施）などにも取り組んだ。課題として、PTA役員の地区割りが表面化してきた。例を挙げると、上今井は、新6年が1世帯のみ、東吉田（下今井含）は、18世帯と多い。役員の割り振りを平均化するのが難しい。さらに、卒業までに1回のPTA役員の原則が崩れてきている。地区割りの在り方を議論していく必要がある。

(10) その他

保健管理・保健指導（・保健推進研究校・歯ブラシマン・歯の標語コンクール）・読書指導（読み聞かせ・読書週間）給食指導（レシピ集作り・親子弁当づくり）等については、それぞれの担当の創意工夫により充実した取り組みが行われた。教科以外に関しても、切子・養蚕と豊の伝統を引き継いできた。家庭・地域との連携を図ることにより、学校・家庭・地域における双方向の関係作りをさらに進めて行きたい。

来年度も、課題を明確にし、目指す方向を全職員の共通理解の下、家庭・地域との連携を重視し、確かな学力としなやかな心を身に付けた「たくましく心豊かな子ども」の育成を図っていきたい。